

郡上おどり保存会監修

郡上おどり

大百科

郡上おどりの歴史

郡上おどりは四百年もの歴史をもつと言われていますが、記録に残されているものは断片的であり多くありません。というのも郡上おどりは本来、民衆のものであったため支配層などの文字による記録の中にはあまり登場していないからです。そんな中からではありませんが、少しずつ歴史を紐解いておどりの歴史を探っていきましょう。

十六世紀に日本各地で盛んになった念仏おどり、風流おどりの流行は山深い郡上の地にも伝わりました。

寛永年間（一六〇〇ごろ）郡上藩主であった遠藤慶隆は城下町の整備をすすめる反面、ソフト面では士農工商の融和をはかるため、それまでバラバラに踊られていた踊りを盆祭りの夜に城下に集め、奨励したことが郡上おどりとして盛んになった最大の理由といわれています。

庶民の娯楽の少なかった時代におどりは最大の娯楽として発展していきました。一八二〇年に出された触書「城番年中行事」にも家臣および家族はおどりに行くことを禁ずるという記録があることから、当時の武士たちも役人の目を逃れてこっそりおどりの輪に加っていたことが想像できます。

おどりは若い者たちによってひやかされ、混ぜられることが公然とおこなわれました。男衆は煙草いれを腰にさし、浴衣の裾をめくり上げて下駄履きという粗野に見える姿で若さを發揮して踊りました。女性は浴衣姿に手ぬぐいをかぶりつつましさを演じました。恋の逢瀬を楽しむ公認の場として盛んだったことは、おどりの歌詞の中に男女の情愛を唄ったものが多いことからわかります。

また城下町として栄えた郡上八幡には旅芸人が多く訪れては口説き唄や芸能をもたらし、伊勢参りや京へ江戸への人の行き来の中からも各地のおどり唄、座敷唄なども伝えられて郡上の土の中にしみいっていきました。ここに郡上おどりの特徴のひとつであるおどりの種類の多さの理由があります。

幕末には七大縁日がきめられて、七月十六日の天王祭（八坂神社）に始まり八月一日の三番祭（大乘寺）、八月七日の弁天七夕祭（洞泉寺）、十四日から十六日までの盂蘭盆会、そして八月二十四日の杵形地藏祭とされていました。

明治七年（一八五〇）には明治政府の欧化政策により郡上おどりの禁止令が出されたこともありました。大正十一年（一九二二）には郡上おどり保存会が発足し、郡上おどりを全国にひろげる大きな役割をはたしました。

娯楽が自粛された第二次大戦中も郡上おどりは戦没者慰霊の名目で例外に続けることが認められ、終戦を告げる玉音放送のあったその数時間後でさえ、憔悴しきった人々の中から誰ともなく唄が出ておどりの輪ができたと言われています。

郡上おどりの特徴

まずはその開催期間の長さ。お盆を中心に七月中旬から九月上旬まで、実に二ヶ月ちかくをのべ三十一夜にわたって開催します。この長大な開催期間は日本最長の盆踊り期間といえます。

またお盆の四日間は明け方まで盛大におどり明かします。「徹夜でおどるなんて何ておどり好きなお土地柄だろう。」と思われませんが、これは日本の祭りのメインタイムは真夜中という太古からの歴史のひとつであり、少し前までは日本中の多くの祭りで見られたことです。夜半から東の空が白みはじめる頃にかけておどりはピークをむかえ、ひとつ輪に加わっておどり楽しめば、本来の盆踊りの伝統や魅力を生きた形で体験してすることになります。

おどり全体のスタイル

おどりは会場の真ん中の据えられたおどり屋台（土地ではやかたと呼びます）を中心に輪を作っておどります。やかたには唄を唄う「音頭とり」、演奏をする「囃子かた」がのり、唄と伴奏を一手に引き受けます。

提灯に灯がはいると情緒は一段と高まりますが、やかたの天井や街の通りで提灯に混ざって四角錐をあつめたような形の灯籠を見ることが出来ます。これは「切り子灯籠」と呼ばれるもので、四方の角は魔除けを意味し、先祖の霊や精霊を迎えて、共に踊るといふ盆おどり本来の目的を今に示しています。ちなみに郡上おどりの代表歌「かわさき」の囃子ことばである「アーンソレンセ」も祖霊祭ということばがなまったものといわれています。庶民の娯楽として発展した郡上おどりも、こうした中に「祖先のかたち」を見ることが出来ます。

おどりの種類

おどり種目が多いのも郡上おどりの特徴のひとつです。

「古調かわさき、かわさき、三百、春駒、ヤツチク、げんげんばらばら、猫の子、甚句、さわぎ、まつさか」と十曲を数えます。

これら踊られるおどりの配列は、近年の研究で運動生理学上きわめて合理的な配列であることがわかりました。

これは、踊りの全体構成が準備運動の「かわさき」に始まって、本運動の「三百、春駒」、骨休めの「ヤツチク」を中に、早いテンポの「げんげんばらばら」から「猫の子」そして整理運動にあたる「まつさか」へと、ひとまわりするようにできています。

しかもこの順番は、必ずしも一定したものではなく、その時の踊り場の調子を見て硬軟・緩急の踊り種目を組み合わせてゆくもので、郡上おどりが夜明かしで踊っても楽しくおどれ、音頭取りも囃子方もともに疲れることのないように長い歴史の中で仕組まれてきたこ

とがわかります。

かわさき

「郡上の八幡出てゆくときは雨も降らぬに袖しぼる」を代表歌とする「かわさき」は、大正三年（一九一四）に開かれた共進会（今でいう博覧会）に上演し、郡上おどりを広く全国に普及させるため、郡上之曲「花のみよしの」をもとに古調かわさきの動きを取り入れて新しくととのえられたものです。落ち着いた歌詞や優雅な踊りの動きは郡上おどりの代表歌として今では広く親しまれています。

かわさきの歌詞

郡上の八幡出て行く時は 雨も降らぬに袖しぼる

天のお月様ツン丸コテ丸て 丸て角のてそいよかる

郡上の殿様自慢のものは金の髻標に七家老

心中したげな惣門橋で小駄良才兵衛と酒樽と

金が出る出る畑佐の山で 銀と鉛と赤がねと

向小駄良の牛の子見やれ 親が黒けりや子も黒い

愛宕三月桜でくもる くもる桜に人が酔う

忘れまいぞえ愛宕の桜 縁を結んだ花じゃもの

祭り見るなら祖師野の宮よ 人を見るなら九頭の宮

音頭とる娘の可愛い声で 月も踊りも冴えてくる

お国自慢にゃ肩身が広い 郡上おどりに鮎の魚

雪の降る夜は来ないでおくれ 隠しきれない下駄の跡

咲いた桜になぜ駒つなく 駒が勇めば花が散る

秋葉三尺お城のふもと 今日鳴る鳴る時の鐘

安久田こんにやく名皿部ごぼう 五町だいに小野なすび

嫁をおくれよ戒仏薬師 小駄良三里に無い嫁を

見たか聞いたか阿弥陀ヶ滝の 滝の高さとあの音を

今夜逢いましよ宮が瀬橋で 月の出るところ上るころ

泣いて別れていつ逢いましよか 愛しいあなたは旅のかた

花の愛宕に秋葉のもみじ 月がのぞくか吉田川

歌も続くが踊りもつづく 月の明るい夜もつづく

踊らまいかよ祖師野の宮で 四本柱を中にして

愛宕山から吉田の流れ ながめ見あかぬ宮瀬橋

鐘がなるのか撞木がなるか 鐘と撞木と合うてなる

郡上はよいとこ住みよいところ 水もよければ人もよい

めでためでたの青山様は 菊の御紋に葉も茂る

郡上の八幡葉菊の御紋 四万余石の城下町

わかれわかれて歩いておれど 　いつか重なる影法師

散ると心に合点はしても 　花の色香につい迷う

娘島田に蝶々がとまる 　とまるはずじゃよ花じゃもの

わしが出しても合わまいけれど 　合わぬ所はごめなさりよ

山に抱かれて流れに沿うて 　踊る絵の町歌の町

わしの心と向かいの山は 　ほかに気はない松ばかり

桜三月あやめは五月 　菊は九月の末に咲く

梅が咲いたと都の便り 　郡上は雪じゃと返す文

恋しやさしや雪駄の音は 　主はどなたか知らねども

遠く離れて会いたい時は 　月が鏡になればよい

うたいなされよ向いのお方 　歌でこ器量は下がりやせぬ

歌でこ器量もしいち下がりや 　時の相場で上げてやる

もはや川崎ややめてもよかる 　天の川原は西東

春駒

郡上は藩主遠藤慶隆が馬の飼育を奨励し、毎年七月に八幡城一之門前で毛付市（徴馬の制開きました。また宇治川の先陣争いの名馬磨墨は郡上の産とする逸話が残っており、この地は馬の一大産地であったことがうかがえます。

元歌は越前からやって来る鯖売りのかけ声に変化したものというのが定説ですが、手綱さばきの勇ましい姿が、威勢のよい踊りの動きに取り入れられ、お囃子の横笛の音は馬のいななきに、軽快なバチさばきの三味線の響きは馬のひづめの音にさえ聞こえてきます。

春駒の歌詞

(七両三分の春駒、春駒)

郡上は馬どこあの磨墨の 名馬出したも気良の里

私や郡上の山奥育ち 主と馬曳く糸も引く

金の髯標は馬術の誉れ 江戸じゃ赤鞘郡上藩

駒は売られていななき交わす 土用七日の毛付市

なんと若い衆よたのみがござる 今宵一夜は夜明けまで

馬は三歳馬方はたち 着けたつづらの品のよさ

小駄良才兵衛と朝顔の花 今日もさけさけ明日もさけ

日照りしたとて乙姫様の 滝の白糸切れはせぬ

村じゃ一番お庄屋様の 小町娘の器量のよさ

踊り子が来た大門さきへ 朱子の帯して浴衣着て

二十五日は天神祭り ござれ小瀬子の茶屋で待つ

東殿山からのぞいた月を 映す鏡は吉田川

様は三夜の三日月様よ 宵にチラリと見たばかり

親のない子に髪結てやれば 親がよろこぶ極楽で

様が様なら私じゃとても かわる私じゃないわいな

親の意見なすびの花は 千に一つの無駄がない

川の瀬でさえ七瀬も八瀬も 思いきる瀬もきらぬ瀬も

はやす太鼓が瀬音に響きや 鮎も浮かれて踊りだす

揃た揃たよ踊り子が揃た 二番すぐりの麻の様に

村じゃ一番お庄屋様の 小町娘の器量のよさ

郡上の八幡よい木がござる 鏡見たよな水もある

踊り助平が今来たわいな わしも仲間にしておくれ

おさば押せ押せ下関までも おさば港が近くなる

踊り踊つて嫁の口なけりや 一生後家でもかまやせぬ

音頭取りめが橋から落ちて 橋の下でも音頭とる

踊り上手でしんしょ持ちようて 赤いたすきの切れるまで

遠く離れて咲く花待てば 散りはせぬかと気はもみじ

思うことさえ言われぬ口で 嘘がつかれるはずがない

島田娘と白地の浴衣 ちよっとしたまに色がつく

からむ朝顔ふり切りかねて 身をばまかせた垣の竹

肩をたたくは孝行息子 すねをかじるはどら息子

声はすれども姿は見えぬ 様は草場のきりぎりす

様が草場のきりぎりすなら 私しゃ野山のほととぎす

いやな雪じゃとはね返しても 義理が積れば折れる竹

花は咲いてもわしゃ山吹きの ほんに実になる人はない

愛宕山から春風吹けば 花の郡上はちらちらと

今日は日がよて朝からようて 思う殿まに二度出会った

人は一代名は末代と およしゃお城の人柱

音頭取りめが取りくたびれて さいた刀を杖につく

三百

宝暦九年（一七五九）六月、丹後の宮津から四万八千石で入部した青山幸道は、宝暦の

一揆で疲弊しきった藩内を見て、移封の供の者の長途の労をねぎらい、また藩内から出迎えた者にも身分上下の区別なく、三百文ずつあたえたといわれています。

それに驚き、感激した里人たちが地踊りを思わず披露したといい、その踊り姿が「三百」となって今に伝わっています。

二百の歌詞

(ハ ヨーイ ヨイコリヤ)

今年始めて三百踊り おかしからずよ他所の衆が

誰もどなたも揃えてござれ 小豆かすよにゴシヨゴシヨと

おらが若い時やチヨチヨラメてチヨメて薬罐(やかん)かけるとてびくかけた

越前ぼっかの荷なら そこへおろすな鯖くさい

買おておくれよ朝鮮ベッコウのかんざしを 村でささぬはわしゃ一人

どじょうすいて来たに おかかなすびのほぞ取りやれ

どっこいしよと堀越を越えて 行けば宮代一夜とる

宇山通るとて開笹(かいざさ)みれば 森屋おりんが化粧する

郡上に過ぎたは長滝講堂 飛驒に過ぎたは一の宮

切れてしまへばバラバラ扇子 風のたよりもさらさない

泣いてわかれて松原行けば 松の露やら涙やら

五月水ほど恋しのばれて 今じゃ秋田の落とし水

泣いてわかれて清水橋こえて、五町の狭(せば)岩でけつ叩く

思い出してはくれるか様も わしも忘れるひまがない

那比の宇留良(うるら)やのう亀尾島も、住めば都じあのや殿ま

土京鹿倉のどんびき踊り 一ツとんでは目をくます

小坂歩危坂別れてくれば もみじ散るやら涙やら

てっかりてっかりてっかりと金のようらく下げたよな

竹の切株ちゃ酒天童子(しゅってんどうじ)のしょんべんけ 澄まず濁らず出ず入らず

何もかも仲間 なすび汁煮りゃなお仲間

わしがだいても合わまいけれど 合わぬところはごめなさりよ

今の音頭さはどんまいことはねた おらもそこらと思っていた

盆が来たならするぞえかかま 箱の宝の朱子の帯

暑い寒いのあいさつよりも 味噌の百奴も呉れりゃよい

はげた頭を薬罐じゃと思て 番茶つまんでしかられた

様となら行くわしゃどこまでも しだれ柳のうらまでも

月のあかりにちよいと騙されて 様を帰して気にかかる

今年しゃ何んでもかんでも嫁入りせにゃならぬ 同じすること楽にする

嫁入りしたけど幸せ悪て へそが出べそで帰された

蕾が花よとゆうたは道理 開きや嵐にさそわれる

声がかれたに水くりよとゆたら くんて呉れたよ砂糖水を

恋にこがれて鳴く蝉よりも なかぬ虫が身をこがす

娘したがる親させたがる 箱の宝の朱子の帯

お前二十一わたしは十九 四十仲良く暮したい

姉がさすなら妹もさしやれ 同じ蛇の目唐傘を

同じ蛇の目の唐傘させば どちが姉やら妹やら

音頭取りめが取りくたびれて さいた刀を杖につく

やっちく

城下町として栄えた郡上八幡へは、江戸末期になるといろいろな旅芸人が入りこみました。

中でも両方の手に八枚の竹片を連ねて打ち鳴らしながら、「鈴木主水」や「八百屋お七」を哀調をこめて門付して唄い回ったのが踊り化されたものといわれています。

歌詞には、この土地の歴史伝である、「郡上宝曆義民伝」や「郡上藩・凌霜隊」なども作られており、(あら、八竹サが来た)ということばから「アラ・ヤッチクサツサ」の囃子ことばが生まれこのおどりの題名になりました。

やっちくの歌詞

「宝曆義民伝の巻」

上の巻

(アラ ヤッチク サツサ)

わしがチヨイト出て べんこそなけれど 私ゃ郡上の 山中家に住めば

お見かけどおりの若輩なれば、声も立たぬがよ文句やも下手よ

下手ながらもひとつは口説く 口説くに先立ち 頼みがござる

とにかくお寺は 檀家衆がたより やせ畑作りは こやしがたより

村の娘達や若い衆がたより そして又若い衆は娘さんがたより

下手な音頭さんは お囃子たより やっちくやっちくさと お囃子たのみ

調子が揃えば 文句やにかかる

これは過ぎにし其の物語り 聞くと哀れな義民の話し

時は宝暦五年の春よ 所は濃州郡上の藩に

領地三万八千石の その名金森出雲の守は

時の幕府のお奏者役で 派手な勤めに其の身を忘れ

すべて政治は家老に任せ 今日も明日もと栄華に耽る

金が敵か浮世の習い お国家老の粥川仁兵衛

お江戸家老と心を合せ ここに悪事の企ていたす

哀れなるかな民百姓は あれもこれもと課税がふえる

わけて年貢の取りたてこそは いやが上にも厳しい詮議

下の難儀は一方ならず かかる難儀に甚助殿は

上の噂をしたとの科で すぐに捕らわれ水牢の責め苦

責めたあげくが穀見ヶ原で 哀れなるかな仕置ときまる

かくして苦しむ百姓衆を 見るに見かねて名主の者が
名をば連ねて願ひ出すれど かなうどころか詮議は荒く
火責め水責め算盤責めに 悶え苦しむ七十と余人
飢え死にする者日に増すばかり もはや堪忍これ迄なりと
誰が出したかよ回状が廻る 廻る回状が何よと問えば
北濃一なるアノ那留ヶ野に、心ある衆は皆集まれと
事の次第が記してござる

中の巻

時が来たかよ三千余人 蓆旗やら竹槍さげて
百姓ばかりが雲霞のごとく 今にお城へ寄せんず時に
待った待ったと人押し分けて 中に立ったは明方村の
気良じゃ名主の総代勤め 人じゃ知られた善右衛門殿で
江戸に下りて將軍様に 直訴駕籠訴を致さんものと
皆に凶れば大勢の衆が 我もわれもと心は一つ
わけて気強い三十と余人 道の難所と日数を重ね
やがて着いたのが品川表 されど哀れや御用の縄は
疲れ果てたるその人々を 一人残らず獄舎に繋ぐ
開くも涙よ語るも涙 ここに哀れな孝女の話

名主善右衛門に一人の娘 年は十七その名はおせき

父はお江戸で牢屋の責め苦 助け出すのは親への孝行

そつと忍んで家出をいたし 長の道中もかよわい身とて

ごまの蠅やら悪者どもに すでに命も危ういところ

通り合わせた天下の力士 花も実もある松山関と

江戸屋親分幸七殿が 力あわせて娘を助け

江戸に連れ行き時節を待てば 神の力か仏の業か

幸か不幸か牢屋が焼ける それに紛れて善右衛門殿は

逃れのがれて隅田の土手で 巡り合うのも親子の縁よ

時節到来御老中様が 千代田城にと御登城と聞いて

名主善右衛門初めといたし 同じ願いに五人の者は

芝で名代将監橋で 恐れながらと駕籠訴いたす

かくて五人はその場を去らず 不浄縄にといましめられて

長い間の牢屋の住まい 待てど暮らせど吟味はあらず

も早や最後の箱訴なりと 江戸に下りて將軍様に

箱訴なさんと出立間際

下の巻

話かわりて孫兵衛宅の 妹お滝は利発な生れ

年は十六つぼみの花を 水仕奉公と事偽わりて

二年前から間者の苦勞 今日も今日とて秘密を探り

家老屋敷をこっそり抜けて 家へ戻つて語るを聞けば

下る道中太田の渡し そこに大勢待ち伏せなして

一人残らず捕えるたくみ そこで孫兵衛につこり笑い

でかした妹この後とても 秘密探りて知らせてくれよ

言うてその夜に出立いたす 道の方角がらりと変えて

伊勢路まわりで桑名の渡し 宮の宿から船にと乗りて

江戸に着いたは三月なかば 桃の節句はのどかに晴れる

城下離れし市島村の 庄屋孫兵衛一味の者は

四月三日に箱訴いたし すぐにお裁き難なく終り

悪政露見で金森様は 遂にお家も断絶致す

それに連なる重役たちも 重いお仕置きまた島流し

名主お庄屋その他の者は 願い主とて皆打ち首と

ここに騒動も一段落し 宝暦九年は青葉の頃に

郡上藩へは丹後の宮津 宮津城主の青山様が

御高四万八千石で ご入城とは夢見る心地

政治万端天地の變り 長の苦しみ一時に消えて

いつものどかに郡上の里は 目出度めでたの若松様か
枝も栄える葉もまた茂る これぞ義民の賜ぞとて
共に忘るなその勲しを 共に伝えん義民の誉れ

「凌霜隊伝」

上の巻

これは過ぎにし其の物語り 聞くも哀れな凌霜隊よ
時は慶応四年の春よ 日本国中二つに割れて

勤王・佐幕の嵐が襲う 所は濃州郡上の藩で

領地四万八千石の 青山大膳幸宣公は

年端もゆかない御歳なるが これを助けるお国の家老

鈴木兵左衛門評議をかさね 青山藩家の安泰ねがい

先ずは朝廷へ恭順いたし 残る不安を使者差し立てて

お江戸家老の朝比奈様へ 話きまりて国元からは

選り抜かれし十五の藩士 文武すぐれて血気の盛り

お家の大事と幕府の恩義 報いられるは一筋なるぞ

脱走人との汚名におじず 弥生二十日の朝早きうち

中野村なる鎮守の森で 心ちかいて中津の宿へ

使命おびたる馬急がせて 塩尻まわりて中仙道を

江戸は本所でその名も高い 船宿菊屋でわらじを解けば
義挙に加わる名を読み上げて 隊長朝比奈茂吉と決まり
副長坂田の林左衛門と 会津派遣使速水の小三郎
その名郡上藩凌霜隊で 総勢そろえて四十と五人
祝う御神酒で心をかため

中の巻

一夜明くれば四月の十日 夜更け計りて江戸川のぼり
下総まわりで会津へ向かう ざんぎり頭に鉢巻しめて
陣股引にて筒袖すがた 日光街道の小山の宿で
草風隊との銃弾しきり 敵がばたばた倒れる中を
なおも突き来る一団めがけ 凌霜・貫義の隊士がいどみ
激しくつづきし白兵戦も 味方にあがりし勝どきの声
泥にまみれて砲煙くぐり 宇都の宮から今市あたり
大内峠の激戦越えて 九月六日に鶴が城へ入る
西出丸では防塁築き 白虎隊士と励まし合いて
共に陣所の配備を固め かかる折しも西軍側に
城は囲まれ砲弾ひびき 東軍の不利いや増すばかり
かくて籠城やむなき次第 あとに残りし三十六士

敵の目指せる総攻撃に 昼夜別なく火の手に追われ
西出丸さえ早や焼け落ちる さればと隊士は陣所を変わり
砲声とどろくそのただ中を 目に物見せんと出撃いたす
されど奥羽の連盟くずれ 情勢やむなき降伏となる
されば隊士も悄然として 無念の感涙やる方もなく
猪苗代へと謹慎される

下の巻

捕えられたる身に雪つもり 深手の隊士を六人残し
大垣藩士の護衛を受けて 腰は丸腰汚れたみなり
郡山から宇都宮すぎて 歩きつづけて千住にと着く
郡上藩士の冷たい仕打ち 伝馬船へと早や押し込まれ
品川沖から千石船で 遠州灘でも災難にあいて
命からがら烏羽へと到る 岐阜の美江寺を出てから先は
不浄縄にいていましめられて 囚人駕籠へと乗せられまして
腹も煮えくる非道の仕打ち 難儀かさねて中野へ帰る
そこで又もや揚屋入りと 科人なみのヨきびしい責め苦
一同観念したことなれど 身内の面会許されもせず
便り差し止め世を断つ思い 赤谷あたりの揚屋ぐらし

風も通らず光も差さず 病気になる者日に増すばかり
これを見かねて近郷の僧侶 慈恩寺様へと集まり来たり
藩主に嘆願長敬寺様へ 移り変わりてひと息いれる
明治二年の秋ともなれば 戦死隊員の法要も済まし
その夜奇しくも藩庁からは 自宅謹慎の御触れが回る
手に手を取りてヨ喜び勇み 留守居の家族も喜び明かす
さても哀れな凌霜隊士 あゝ凌霜隊その魂は
郡上の里にて生きつづけたり 共に伝えんその真心を
永久に伝えんその真心を

「参拝場所づくし」

一にゃきのとの大日如来 二には新潟の白山様よ
三にゃ讃岐の金毘羅様よ 四には信濃の善光寺様よ
五つ出雲の色神様よ 六にゃ六角堂の六地藏様よ
七つ七尾の天神様よ 八つ八幡の八幡様よ
九には熊野の権現様よ 十にゃ所の氏神様よ

「鈴木主水の巻」

花のお江戸のその傍らに 聞くも珍らし人情ばなし
ところ四つ谷の新宿町よ 紺ののれんに桔梗の紋は

音にきこえし橋本屋とて あまた女郎衆のあるその中に

お職女郎の白糸こそは 年は十九で当世そだち

愛嬌よければ皆人さんが 我もわれもと名指しで上る

わけてお客はどなたと聞けば 春は花咲く青山あたり

生れは濃州郡上のごおり 鈴木主水という侍よ

女房持ちにて二人の子供 五つ三つはいたずらざかり

二人子供のあるその中で 今日も明日もと女郎買いばかり

見るに見かねて女房のお安 ある日わが夫主水に向かい

これさわが夫主水様よ わたしゃ女房で妬くのじゃないが

子供二人はだてには持たぬ 十九や二十の身じゃあるまいし

人に意見も言う年ごろに やめておくれよ女郎買いばかり

金のなる木を持ちゃさんすまい どうせ切れるの六段目には

連れて逃げるか死情（しんじゅう）するか 二つに一つの思案とみえる

そして二人の子供が不憫 子供二人と私の身をば

末はどうするわが夫様よ 言えば主水は腹立ち顔で

何んの小癪な女房の意見 己が心で止まないものを

女房だてらの意見じゃ止まぬ 愚知なそちより女郎衆が可愛い

それが否なら子供を連れて そちのお里へ出て行かしやんせ

愛想づかしの主水のことば　そこで主水はこやけになりて

いでて行くのが女郎買い姿　あとでお安は聞く悔しさと

いかに男はわがままじゃとて　死んで見しようと覚悟はすれど

二人の子供につい引かされて　死ぬにや死なれず嘆いておれば

五つなる子がそばへと寄りて　これさ母さんなぜ泣かしゃんす

気色悪けりやお薬あがれ　どこぞ痛けりやさすつてあげよ

坊が泣きます乳くだしゃんせ　言えばお安は顔ふり上げて

どこも痛くて泣くのじゃないが　幼なけれどもよく聞け坊や

あまりとと様身持ちが悪い　意見いたせば小癩なやつと

たぶさつかんで打擲なさる　さても無念な夫の心

自害しようと思悟はすれど　後に残りしそちらが不憫

どうせ女房の意見じゃ止まぬ　さればこれから新宿町の

女郎衆頼んで意見をしよと　三つなる子を背中に背負い

五つなる子の手を引きまして　出てゆく姿のさも哀れなる

行けば程なく新宿町よ　店ののれんは橋本屋とて

見れば表に主水の草履　それと見るより新造を招き

わしはこちらの白糸さんに　どうぞ会いたい会わせておくれ

アイと新造は二階へ上り　これさ姉さん白糸さんよ

どこのお女中か知らない方が 何かお前に用ありそうな

会うてやりゃんせ白糸さんと 言えば白糸二階を下りて

わしを尋ねるお女中というのは お前さんかえ何用でござる

言えばお安は初めて会うて わしは青山主水が女房

お前みかねて頼みがござる 夫主水は勤めの身分

日々のお勤めをおろかにすれば 末は御扶持に離れるほどに

ここの道理をよく聞き分けて どうぞわが夫主水殿に

意見なされて白糸さんよ せめてこの子が十にもならば

昼夜揚げづめなさりよとままよ または私が去られた後で

お前女房になりゃんすとても どうぞこのち主水殿が

三度来たなら一度は上げて 二度は意見をして下しやんせ

言えば白糸ことばに詰まり わしは勤めの身の上なれば

女房持ちとは夢にも知らず ホンに今まで懇ろなれば

さぞや憎かるお腹も立とう わしもこれから主水様に

意見しましょうお帰りなされ 言うて白糸二階へ上がる

ついに白糸主水に向い お前女房が子供を連れて

わしに頼みに来ました程に 今日はお帰りとめては済まぬ

言えば主水はにっこり笑い 置いておくれよ久しいものだ

ついにその日は居つづけなさる 待てど暮らせど帰りもしない

お安子供を相手にいたし もはやその夜は早や明けたれば

支配方より使いがありて 主水身持ちが不埒じゃ故に

扶持も何にも召し上げられる 後でお安は途方に暮れて

あとに残りし子供が不憫 思案しかねて当惑いたし

扶持に離れて長らくおれば 馬鹿なたわけと言われるよりも

武士の女房じゃ自害をしよと 二人子供を寝かしておいて

硯とり出し墨すり流し 落つる涙が硯の水よ

涙とどめて書き置きたし 白い木綿で我が身を巻いて

二人子供の寝たのを見れば 可愛いかわい子に引かされて

思い切り刃を逆手に持ちて ぐっと自害の刃のもとに

二人子供は早や目を覚し 三つなる子は乳とりすがり

五つなる子は背中にすがり これさ母さんのう母さんと

幼な心でたゞ泣くばかり (以下略)

「白井権八・小紫の巻」

国は中国その名も高き 武家の家老に一人のせがれ

白井権八直則こそは 犬の喧嘩が遺恨となりて

同じ家中の本庄氏を 討ってたちのき東をさして

下る道中桑名の渡し わずかばかりの船賃ゆえに

あまたの船頭さんに取りかこまれて すでに危きその折からを

これを見かねて一人の旅人 白井助けて我が家に帰える

これぞ名におう東海道の その名熊鷹山賊なるぞ

その家うちには美人がござる 名をば亀菊つぼみの花よ

見れば見るほどおとなしやかで その夜権八がヨ寝間にとしのび

これさ若様侍様よ 知って泊りか知らずにいてか

この家主人は盗賊なるぞ わしも三河の富家の娘

二年前からこの家に取りられ 永の月日を涙で送る

故郷恋しやさぞふた親も 案じしゃんすで有ろうと思ふ

お前見かけてたのみがござる どうぞ情けじゃ不憫じゃほどに

わしを連れ立ちこの家を逃げて 故郷三河へ送りたまえと

くどきたてられ権八殿は さすがよしある侍ほどに

そのわけがらをば残らず聞いて さればこの家の主人を始め

手下盗賊皆切り殺し お前故郷へ御連れ申す

二人密かに約束かため 娘亀菊立ち出で行きやる

それと知らずか熊鷹殿は 手下幾多にささやきけるは

今宵泊めたる若侍の 腰にさしたる一腰こそは

黄金作りの名作物よ 二百両から先なる品じゃ

それを奪わん我等がたくみ 奥の座敷にねかせて居いた

最早時刻も夜半の頃よ 奥の一間に切り込みければ

されば白井は心得たりと それと白井は抜く手も見せず

主人熊鷹手下のやつら 一人残らず皆切殺し

それと亀菊手を引きまして なれし三州矢作の長者

一部始終のはなしを致す 長者夫婦は喜び勇み

されば此の家の婿にもせんと すすめられども権八殿は

なをも仕官の望もあらば いとまごいして立たんとすれば

今は亀菊栓かた涙 是非も泣く泣く金取り出して

心ばかりの饞なりと 云へば権八気の毒顔に

志ざしとて頂き納め 花のお江戸へ急ぎて下る

行けば程なく川崎宿の 音に聞こえし萬年屋とて

ここにしばらくお休みなさる さればこれより品川迄の

道は何里とお尋ねなさる 道はわずかの二里程なれど

鈴ヶ森とて難所がござる 夜ごと日ごとの辻切りあれば

今宵当所にお泊りあれと すすめられども権八殿は

大小指す身がそれしき事で 恐れ泊らば世間の人に

憶病未練の侍なりと 長く笑われ恥辱の種よ

それはもとより望でござる 勇み進んで品川迄の

されば白井の権八殿と 同じ茶屋にて休んで居たる

花のお江戸に其の名も高き 男伊達にて幡随院長兵衛

白井出て行く後見送りて さすが侍あっぱれ者よ

されば若衆の手並を見んと 後に続いて長兵衛こそは

鈴ヶ森へと早さしかかる まだも此の先詠みたいけれど

上手で長いはこの場によいが 下手で長いこた先生やに御無礼

やめろやめろの声なき内に ここらあたりで切止めまする

げんげんばらばら

江戸時代の御殿女中の手まり遊びの様子が、踊り姿になったもので着物のたもとを手繰る優雅なしぐさが踊りの特徴です。歌詞の元歌は古くから郡上地方で一般に唄われていたわらべ歌とか糸引きの歌でした。

げんげんばらばらというちょっと変わったことばの意味は、雉子の鳴声ケンケンと、羽根をばたつかせる音から「ケンケンバタバタなぜ鳴くね、親がないか子がないか」というわらべ歌からきています。

げんげんばらばらの歌詞

ハー げんげんばらばら何事じゃ 親も無いが子も無いが

一人貰った男の子 鷹に取られて今日七日

七日と思えば四十九日 四十九日の墓まいり

叔母所へ一寸寄りて 羽織と袴を貸しとくれ

有るもの無いとて貸せなんだ おっぱら立ちや腹立ちや

腹立ち井川へ水汲みに 上ではとんびがつつくやら

下ではからすがつつくやら 助けておくれよ長兵衛さん

助けてあげるが何くれる 千でも万でも上げます

器量がよいとてけん高ぶるな 男がようて金持ちで

それで女が惚れるなら 奥州仙台陸羽の守

陸羽の守の若殿に なぜに高尾がほれなんだ

ハー立つ立つづくしで申すなら、

一月 かどには松が立つ 二月 初午稲荷で幟立つ、

三月 節句で雛が立つ 四月 八日 nya 釈迦が立つ、

五月 節句でのぼり立つ 六月 祇園で祭り立つ、

七月 郡上で踊り立つ 八月、九月のことなれば、

秋風ふいてほこり立つ 十月 出雲にや神が立つ

十一月のことなれば こたつが立ってまらが立つ

まらが立ったら禪やぶれて損が立つ、

十二月のことなれば借金とりが門に立つ

あまり催促厳しゅうされて うちの力かほんとに腹が立つ。

ハ一郡上八幡開祥社 十七・八の小娘が

さらしの手拭い肩にかけ 小ぬか袋を手にもちて

風呂屋は何処よと尋ねたら 風呂屋の番頭の云う事にや

風呂は只今抜きました 抜かれたあなたは良いけれど

抜かれた私の身が立たぬ

ハ一髻(びん)のほつれをかき上げながら 涙でうるむふるい声

あたしやお前があるがゆえ ほうばい衆や親方に

いらぬ気がねや憂う苦勞 それもいとわず忍び逢い

無理に工面もしようもの 横に車を押さずとも

嫌ならいやじゃと云やしゃんせ 相談づくの事なれば

切れても愛想はつかしやせぬ 酒じゃあるまいその無理は

ほかに云わせる人がある

ハ―駕籠で行くのはお軽じゃないか わたしゃ売られて行くわいな

主の為ならいとやせぬ しのび泣く音は鴨川か

花の祇園は涙雨 金が仇の世の中か

縞の財布に五十両 先へとぼとぼ与市兵衛

後からつけ行く定九郎 提灯バツサリ闇の中

山崎街道の夜の風 勘平鉄砲は二つ玉。

ハ―十四の春から通わせおいて 今さらいやとは何事じゃ

東が切りようが夜が明けようが お寺の坊さん鐘つこうが

向かいの丁稚が庭はこが 隣りのばあさん火を焚こが

枕屏風に日はさそが 家から親達や連れにこが

そのわけ聞かねばいのきやせぬ

ハ―私しゃ紀の国みかんの性よ 青いうちから見染められ

赤くなるのを待ちかねて かき落されて拾われて

小さな箱へと入れられて 千石船に乗せられて

遠い他国へ送られて 肴屋店にて晒されて

近所あたりの子供衆に 一文二文と買い取られ

爪たてられて皮むかれ 甘いか酸いかと味みられ

わしほど因果な物はない

ハ― おほこ育ちのいとしさは

しめた帯からたすきから ほんのりこぼれる紅の色

燃える思いの恋ごころ かわいがられた片えくぼ

恥しいやらうれしやら うっとりお前の眼の中で

私しや夢みるすねてみる

げんげんばらばら何事じゃ 田舎育ちの鶯が

初めてあずまへ下るとき 一夜の宿をとりそこね

西を向いても宿はなし 東を向いても宿はなし

梅のこずえを宿として 花のつぼみを枕とし

落つる木の葉を夜具として 月星ながめて法華経よむ

ハ― 娘十七嫁入りざかり

たんす長持ちはさみ箱　これほど持たせてやるからは

かならず帰ると思うなよ　申しかかさんそりゃ無理よ

西が曇れば雨となり　東が曇れば風となる

千石積んだ船でさえ　追い手が変れば出て戻る

げんげんばらばら何事じゃ私ゃ水辺のほたる虫

生まれはどこよと問うたなら　川は流れの砂の中

お宿はどこよと訪ねたら　昼は木の下草の陰

川端やなぎの露の宿　夜の七つがきたなれば

黒ちりめんの羽織着て　茜の鉢巻しゃんとして

小田原ちようちん腰にさげ

いとし殿さの道照らす

ハ―　筑紫の国からはるばると

父をたずねて紀伊の国　石童丸はただ一人

母のおうせをこうむりて　神室（かむろ）の宿で名も高き

玉屋与平を宿として　九百九十の寺々を

尋ね捜せどわからない　それほど恋しい父上を

墨染め衣にしてくれた ぜんたい高野が分からない

げんげんばらばら何事じゃ 髪は文金高島田

私しゃ花嫁器量よし 赤いてがらはよけれども

ものが言えない差し向かい あなたと呼ぶも口のうち

皆さんのぞいちゃいやですよ

猫の子

郡上地方の農家では山がちで広い田畑が少ないので、古くから養蚕が副業として盛んに行われてきました。養蚕農家では、蚕を食い荒らすネズミ退治に猫が大切に飼われ、子猫のあいらしい所作をまねしたこの踊りは、若い衆が在来の踊りに飽き足りないで、即興的に唄い踊ったものが起こりと思われまます。

歌詞にも字足らずや字余り、方言も入っており、足腰を奔放に動かす愉快的な踊りです。

猫の子の歌詞

(ヨーホーイ ヨイヨイ)

猫の子がよかる 猫でしやわせネズミヨ捕る

猫がねずみ取りや いたちが笑う いたち笑うな我も捕る

桑もよう咲けお蚕もよかれ 若い糸引きよ頼まずに

繭はよう立つ糸目はとれる 廻る見番色男

思つて来たのにこの戸が開かぬ 憎や板戸の掛け金が

憎や板戸の掛け金よりも 掛けた婆さの気が憎や

てつかりてつかりと 金のようらくさげた様な

よせばよいのに舌切り雀 ちよいとなめたが身のつまり

坊主山道 破れし衣 行きも帰りも木にかかる

婆さ枕もと箱根の番所 通りぬけたも知らなんだ

元まで入れて、中で折れたらどうなさる

今年やうろ年うろたえました 腹のおる子の親がない

寝たか寝なんだか枕に問やれ 枕しようじき寝たと云うた

富士の裾野を仰いで見れば 甲斐でみるより駿河よい

様と三日月や宵にばかござる いつかござれよ有明に

ゆんべ夜這人が屋根から落ちて 猫の鳴きまねして逃げた

来るかくるかと待つ夜はこずに 待たぬ夜さ来てかどに立つ

様の親切たはこの煙り 次第しだいとうすうなる

破れ禪や将棋の駒よ 角とおもえば金がでた

色で身を売る西瓜でさえも 中じゃ苦勞(黒)の種がある

一夜御座れと言いたいけれど まんだかかまの側で寝る

だれもどなたも猫の子にしまいか 猫でしやわせネズミヨ捕る

ゆんべ夜這人が猫ふみころいた 猫でかえしやれ熊猫で

なんと若い衆よじゃけらはおきやれ じゃけらしてから子ができた

よそへ踏みだしはばかりながら 音頭とります御免なさりよ

小野の娘と馴染みになれば 日焼けなすびをただ呉れる

桑の中から小唄がもれる 小唄聞きたや顔見たや

おもて四角で心は丸い 人は見かけによらぬもの

腰のひねりで気が行くなれば 筏流しは棹ささぬ

金が持たたい持たたい金が 持てば飲みたい着てみたい

よくも付けたよ名を紙入れと ほんにあるのは付けばかり

思うて通えば千里も一里 障子一重もこりや遠い

いやとゆうのに無理押しこんで 入れて泣かせる籠の鳥

一合の酒も 口でうつせば二合となる

門に立ったる西国巡礼 住まい名のれよ婿に取る

住まい名のれば恥かしよござる 臼の目取りの子でござる

好きと嫌いと一度にきたら 箒立てたり倒したり

けちで助平で問ぬけで馬鹿で お先き煙草で屁をたれる

一つことばか面白いで 品をかえてはやるまいか

さわぎ

江戸中期以降、郡上の藩主は城下町の商工業を盛んにするために京をはじめ各地から商人や職人を招いて店や仕事場を開かせ、これらを保護して繁栄をつづけました。

元禄時代に流行した騒歌（さわぎうた）は、遊里で三味線や太鼓を用いて賑やかに唄ったものが旅芸人などによって伝えられたものであり、豊かな商人たちの座敷余興の歌として定着しました。歌詞には男女間の情緒を唄った艶ものが多くみられます。

踊りには三味線も太鼓も入りませんが派手な手拍子と、ことさら踏み鳴らす下駄の音がすっかりと更けた夜空に勢いよく響きます

さわぎの歌詞

ハー 呑めよ騒げよ一寸先や闇よ 今朝も裸の 下戸が来た

花が蝶々か 蝶々が花か 来てはちらちら 迷わせる

今宵一夜は浦島太郎 あけて口惜しや玉手箱

明日はお立ちかお名残りおしや 雨の十日も降ればよい

無理になびけと云うのは野暮よ 柳と女は風しだい

姉は破れ傘させそでさせん 妹日傘で昼させる

梅の匂いを桜に持たせ しだれ柳に咲かせたい

色のこ白い別嬪さんに惚れて カラスみたよな苦勞する

ついておいでよこの提灯に消して暗うはさせはせぬ

水させ水させ薄くはならぬ 煎じつめたる 仲じゃもの

梅も嫌いよ桜も嫌だ 桃ともものあいが好き

よそで陽気な三味線きいて 内で陰気な小言きく

月のあかりで山道こえて 唄で郡上へ駒買いに

馬鹿な朝顔根もない竹に 命までもとすがりつく

様は良い声細谷川の うぐいすの声おもしろい

惚れてくれるなわしゃ弟じゃに連れて行くにも家がない

浮気男と茶釜の水は 沸くも早いがさめやすい

惚れていれどもすかれておらず 磯のあわびの片想い

今夜寝にくる寝床はどこじや 東枕に窓の下

東枕に窓とは言うたが どちが西やら東やら

さいた盃中見てあがれ 中じゃ鶴亀五葉の松

(さわぎ字余り唄)

竹に雀はあちらの藪からこちらの藪まで チュンチュンばたばた

羽なみを揃えて 品よくとまる 止めて止まらぬ 色の道

娘島田を 根っからポクッリ切って、男のへそに たたきつけ
それでも浮氣の 止まない時は、宗十郎の芝居じゃないが
あんどの陰からひゅうひゅうと化けて出る

竹の一本橋 すべりそうどころがりそうで 危ないけれど
蛇の目の唐傘お手手をつないで、様となら渡る
落ちて死んでも 二人連れ

竹になりたや 大阪天満の、天神様の お庭の竹に
元は尺八 中は笛 裏は大阪天満の天神様の
文を書く 法名を書く 筆の軸

摺鉢を伏せ眺める三国一の
味噌を播るがの富士の山

ござるたんびに
ぼた餅かい餅うどんに素麺 そば、限(きり)やないで

なすび漬食ってお茶まいれ

竹の切株に　なみなみたつぷりたまりし水は

澄まず濁らず出ず入らず

雨はしよぼしよぼ降る　蛇の目の唐傘　小田原提灯

ガラガラピッシャンドッコイ　姉さん今晚は

誰かと思ったら　主さんか

瀬田の唐橋

膳所（ぜぜ）の鍛冶屋と大津の鍛冶屋が朝から晩まで

吞まずに食わずにトツテンカッテン

たたいて延ばして持て来てかぶせた唐金擬宝珠（ぎぼし）

それにうつるは膳所の城

朝顔の花によく似たこのさかずきは

今日もさけさけ明日も咲け

声が出ない時きゃ

干支じゃないけど子丑寅卯辰未の隣りのどん馬のケツを

ギョツギョらしくわえてチュツチュラチュツと、スヤれ

馬のケツからコエが出る

郡上の八幡名広の奥の乙姫電気の職人さんは

水がないので命がけ

郡上おどりに 来年来るやら又来ないやら

来ても逢えるやら逢えぬやら

郡上甚句

甚句という盆踊り歌は、「地の句」が訛ったものといわれ、その地方で歌いつがれたものをさします。これが江戸時代末期に流行したといわれる相撲甚句の影響をうけて、地相撲の盛んな郡上ではおおいに唄われるようになりました。

一般にこのおどりは夜が更けてから踊られることが多く、郡上八幡の町の人には徹夜おどりの夜、ふと目を覚まして枕もとにかすかに聴こえてくる踊りの種類で、今何時頃なのかかわかるのだそうです

郡上甚句の歌詞

櫓太鼓にふと目をさまし 明日はどの手でこいつあ投げてやる

お相撲とりにはどこがようて惚れた 稽古がえりの乱れ髪

相撲にゃなげられ女郎さんにゃふられ どこで立つ瀬がわしが身は

西は富士が嶺東は筑波 中を流るる隅田川

夜明けましたら起しておくれ お前頼りであ居るわいな

相撲取りじゃの道楽じゃのと 云うて育てた親はない

歌うて出たぞえお庭の鳥が いつに変わらぬよい声で

角力にゃ負けてもけがさえなけりゃ 夜さりゃ私が負けてやる

ゆんべ横町で先に力力に出会て おまえめめなか達者なか

白い黒いで自慢なものは おらが在所の繭と炭

小田のかわずは身にあやまりが あるか両手をついて鳴く

ついで行きたい送りに出たい せめて御番の札所まで

どうせこうなりゃ二足のわらじ 共にはいたりはかせたり

馬じゃ磨墨粥川うなぎ ひびく那留石宗祇水

おらが在所の大島村は 米のなる木がおじぎする

盆じゃ盆じゃと待つうちゃ花よ 盆がすんだら何を待つ

お前松虫わしゃきりぎりす 障子ひとえで鳴きあかす

しほり浴衣にかんざし添えて 毛付け土産と投げこんだ

信州信濃の新そばよりも わたしやあなたのそばがよい

盆の十四日にお寺の前で 切子あんどんを中にして

西の山から東の山へ おまえたずねて北の山

他所へふみ出しはばかりながら 音頭とりますごめなさりよ

よその若い衆かよう来てくれた 裾がぬれつら豆の葉で

お前一人か連れ衆はないか 連れ衆あとから駕籠で来る

天気よければ天王様の 宮の太鼓の音のよさよ

小那比松茸前谷わさび 気良じゃ馬の子坪佐炭

いやなお方の親切よりも 好きなお方のやぼがよい

八重の山吹き派手には咲けど 末は実のないことばかけ

惚れりゃ千里も一里じゃなどと 虎の尾につく古狐

紺ののれんに松葉の散らし 待つに来んとは気にかかる

郡上はよいとこ住みよい所 水も良ければ人もよい

上をおもえば限りがないと 下を見て咲く百合の花

姉とゆたれど妹をおくれ 姉はひのえのうまの年

姉はひのえのうまなれど 妹かのえのさるの年

わしとおまえは十円札よ 五円きれてもまだ五円(ご縁)

せかずとお待ちよ時節がくれば 咲いてみせます床の梅

今年やこうでもまた来年は、こうもあるまいなよ殿ま

古調かわさき

天正年間（一五八〇年代）に、伊勢古市の川崎首頭が郡上の地にもたらされたものです。

その手振りや足の踏み方など昔の農耕の所作が踊り化されたものであり、歌詞も飾り気のない庶民生活に根ざしたものや、作業歌が残されていて、国の重要無形文化財に指定されています。

同じ輪踊りでありながら時計の針の逆回りとなる古いかたちをそのまま残し、いかにも奥美濃の素朴な人情に似つかわしい踊りです。

古調かわさきの歌詞

郡上の八幡出て行く時は 三度見かやす枡形を

天のお月様かか盗まれて 雲のあいからかかアかかアと

若い娘と新木の舟は 人が見たがるのりたがる

どんなことにもよう別れんと 様も一口や云うておくれ

わしの殿まはこの川上の 水の流れを見て暮らす

盆にゃおいでよ初い孫つれて 郡上おどりも見るように

向かい小山に日はさいたれど 嫁の朝寝は起こしやせぬ

鶯とりでも初音はよいに 様と初寝はなおよかる

踊りつかれてはや夜が明けた 何の話もできなんだ

思う様なら竹どよかけて 水で便りがしてみたい

声の良い衆はその身の徳じゃ 諸国諸人に思われる

おらが若いときゃ五尺の袖で 路の小草もなびかせた

盆の十四日にや蓮の葉となりて 一夜もまれて捨てられた

咲いて口惜しや千本桜 鳥もかよわぬ奥山に

昔じゃ侍いま世に落ちて 小笹まざりの草を刈る

何がなんでもお前さでなけりゃ 東しゃ切れても夜は明けぬ

天の星ほど夜づまはあれど 月と守るは主一人

高い山には霞がかかる 若い娘にゃ気がかかる

郡上はよいとこ良い茶ができる 娘やりたやお茶摘みに

植えておくれよ畔（あぜ）にも田にも 畔はかかまのしんがいに

今日の田植えは春三月の 桜花かよちらちらと

泥で咲かした此のかきつばた 活けて根じめを見て欲しい

気立て良けりゃと云うたこた云うたが されどご器量が気にかかる

人を泣かせりやまた泣かされる 共に泣いたり泣かせたり

わしと青田と草刈る山に 藪や茨がなけりゃよい
藪や茨がありゃこそよかれ 藪の小陰ものや殿ま
歌は歌やれ話はおきやれ 話や仕事の邪魔になる
天の川原は西東でも 今宵一夜は夜明けまで

まつさか

江戸時代に盛んに行われていた伊勢参りで伊勢古市の木遣音頭が郡上に伝わったもので、囃子ことばの「ア、ヨイヤナ、ヤートセ」は、伊勢音頭の「ヤートコセ、ヨイヤナ」が変化したものです。
単調な節回しでありながら、しみじみとした情感を漂わせるのは、この唄がその夜で最後を告げるおどりとなるからかもしれません。

まつさかの歌詞

ヨーホイ モーツシヨ合点と声が掛るなら
是から文句に掛りましょ
総てお寺は檀家から やせ畑づくりもこやしから
下手な音頭も囃子から おはやし頼む総和様
鵜舟の篝火赤々と 世にも名高き長良川

その水上の越美線 郡上の八幡名にしおう

二百年の昔より 土農工商おしなべて

泰平祝う夏祭り 音頭手拍子面白く

謳い楽しむ盆踊り 郡上の八幡出る時は

雨も降らぬに袖しぼる これぞ真にこの里の

人の心をそのままに いつしか唄となりにける

山は秀いでて水清く 春は桜の花に酔い

夏は緑の涼風や 秋はもみじ葉 茸狩り

冬は雪との戯れと 名所の多き郡とて

訪ねる人の数々に いざや探らん道しるべ

大日ヶ岳仰ぎつつ 阿弥陀ヶ滝をおとなへば

六十丈の虹吐いて 夏よせつけぬ滝の音

滝の白糸長々と 一千年の昔より

由緒はふかき長滝に 今も睦月の六つの日を

喜び菊の花祭り 人は浮かれてくるす野の

宮居に匂う桜花 緑もえでる揚柳寺

のどかなる野の那留石の

その名は高く世に響く 宗祇の流れ今もなお

汲みてこそ知れ白雲の 絶えせぬ水の末かけて

積る翠の山の上に 霞ヶ城の天主閣

朝日に映る金の鯨 昔をしのぶ東殿の

山の端出ずる月影に 匂う愛宕の墨染や

ひがん桜や山桜 訪い来る人の絶間なく

杖ひくからぬ稚児の峰 卯山おろしの風穴に

いでそよそよと立ちし名の 浮きて流るるあさが滝

深き思いを叶橋 行き交う人は深草の

小町にちなむ小野の里 契りはかたき石の面に

写りますます菅公の 冠ならぬ烏帽子岳

ふもとつづぎの村里は 寿永の名馬磨墨の

出でし所と言ひ伝う 名も高光にゆかりある

高賀の山の星の宮 矢納が渚や粥川に

うなぎ群がるそのさまを 振り返りつつ蓬来の

岩間流るる長良川 河鹿の声のおちこちに

ひかれて舟に棹させば 浮世の塵もいつしかに

洗い捨てたる心地する 水の都か花の里

郡上の八幡出る時は 雨も降らぬに袖しぼる

踊りと歌で町の名も 広く聞こえて栄えゆく
里の皆衆も他所の衆も 音頭手拍子うちそろえ
これぞ真に総輪様 永く伝わるこの里の
郡上おどりの誉れをば 万代までも伝えなん

歌の殿様

(一) 歌でお城を

お開きなされよ皆の衆 歌の殿様常縁が
歌で天下に名をあげて 歌でお城を取り戻す
平和の里にふさわしき 歌の郡上の物語り
郡上の城の始まりは 下総東氏が功により
山田の庄を加えられ 承久年間胤行は
剣・阿千葉に館して 郡上東家の開祖となる
文武すぐれしわが東家 勅撰集に名をつらね
その名天下に聞こえたり 戦乱続き消えかけし
足利時代の文学の道 支えし力はわが東家
五山文学あればこそ 殊に七代常縁は
和歌に秀でし功により 公卿將軍の歌会にも

常に列して名は高し 時に関東に乱起り

ときの將軍義政は 常縁公に命じてぞ

東庄回復はかりける 常縁郡上の兵つれて

関東に転戦十余年 そのころ京は応仁の

戦乱ながく打ちつづき 美濃の土岐氏は山名方

郡上の東氏は細川に 昨日の友は今日の敵

争いあうぞ是非もなき ついに土岐氏の家臣なる

斎藤妙椿大挙して 東氏本城篠脇の

城を襲いて奪いけり 常縁関東にこれを聞き

痛く嘆きて歌一首 亡父追善法要に

ちなみて無常歌いしに この歌郡上に伝わりて

開く者胸をうたれけり 妙椿これを伝え聞き

心はかよう歌の道 敵とはいえど常縁の

ゆかしき心思いやり 関東の空に歌だより

ついに一矢も交えずに 十首の歌と引き換えに

郡上の領地返しけり かくて再び常縁の

徳にうるおう郡上領 歌の真実のふれあいに

恩讐こえて睦みあい 戦わずして手に入りし

歌の花咲く郡上領げにもゆかしき和歌の徳

歌の真実の尊とさよ歌で開けしわが郡上

歌でお城も守られて歌の郡上の名も高く

平和日本ともろともに栄えゆくこそうれしけれ

(二) 宗 祇 水

歌の殿様常縁公 歌でお城を取り戻し

いよいよ光る和歌の徳その名天下にとどろきて

時の帝の召しにより公卿將軍の師ともなり

九十四年の生涯はひたすら励む歌の道

宗祇法師も都から 文明二年はるばると

あこがれ訪いし篠脇の 城に学びし古今集

励む三年の功なりて ついに奥義の秘伝うけ

師弟もろとも杖をひく 郡上名所の歌の遺跡

妙見社頭にいたりては 「神のみ山の花ざかり

桜の匂う峰」を詠み 那比神宮に詣でては

「神も幾世か杉の杜みやいはなれぬほととぎす」

文明五年秋すぎて 宗祇都にかえるとき

常縁これを見送りて 別れを惜しむ小駄良川

桜樹の下に憩いては 名残りは尽きず

「紅葉の流るる竜田白雲の 花のみよしの忘るな」と

心をこめし饞の 歌の真実は今もなお

その名もゆかし宗祇水 清き泉はこんこんと

平和の泉とこしえに 歌の聖のいさおしと

奏でつづけるうれしさよ 讃えつづけるゆかしきよ

およし物語

およし稲荷の物語り 昔の歌の文句にも

きじも鳴かずば撃たれまい 父は長良の人柱

ここは郡上の八幡の 霞ヶ城を造る時

お上の評定ありけるが あまた娘のあるなかに

およしといえる娘あり 里の小町とうたわれて

年は二八か二九からぬ 人にすぐれし器量よし

ついにえらばる人柱 聞きたる親子の驚きは

何んにたとえんものもなし 親子は思案にくれ果てて

泣くばかりなる有様も お上の御用と聞くからは

ことわるすべもなく涙 そこでおよしはけなげにも

心をきめて殿様や お城のためや親のため

死んで柱にならんとて 明日とはいわず今日ここに

進んで死出の旅仕度 白のりんずの振袖に

白の献上の帯をしめ 薄化粧なる髪かたち

静かに立ちし姿こそ 霜におびえぬ白菊の

神々しくも見えにける すでに覚悟の一念に

西に向いて手を合わせ 南無や西方弥陀如来

後世を救わせ給えかし また父母にお暇乞い

先立つ不幸許してと あとは言葉も泣くばかり

これが今生のお別れと うしろ髪をばひかれつつ

一足行つては振り返り 二足歩いて後戻り

親子のきずな切れもせず 親も泣くなく見送りて

どうぞ立派な最後をと 口にはいえぬ胸のうち

ただ手を合わすばかりなり かくては時もうつるとて

役人衆にせかれつつ およしひと言父母と

呼ばわる声もかすかなり 空には星の影もなく

ただひと声のほととぎす 声を残して城山の

露と消えゆく人柱 この世の哀れとどめける

これぞおよしのいさおしと 伝え聞いたる人々は

神に祈りて今もなお およし稲荷の物語り

雪のふる夜は来ないでおくれ 隠しきれない下駄のあと

郡上節より 冬

はやす太鼓が瀬音に響きや 鮎も浮かれて踊りだす

郡上節より 夏

今夜逢いましよ宮が瀬橋で 月の出るころ上るころ

郡上節より 秋

愛宕山より春風吹けば 花の郡上はちらちらと

郡上節より 春